

モダン・オーケストラを振る古楽系指揮者たち

那須田 務



10月の読響公演に出演する古楽系指揮者アントニーニ（左）と鈴木雅明



©Marco Borggreve

始まりはアーノンクール

1980年代末に筆者がチューリヒのアーノンクールの自宅を訪ねた折の話から始めたい。その頃、同地の歌劇場でモーツァルトのオペラを振っていた古楽の巨匠は、筆者におよそこんなことを言った。

「あなたがモーツァルトの曲を演奏することになったらどうしますか。楽譜を買って練習？ 私はそんなことはしない。曲に関する様々なことを調べる。どんな時代だったのか、何が流行していて、作曲家の人生はどうだったのか。当時の楽器の響きや楽譜の読み

方。その曲はどんな経緯で作曲されたのか。どのような楽譜で今日に伝えられたのか？ こうしたことをしてから、初めて楽器を手に取る。」

ここに、HIP (Historically Informed Performanceの略。歴史的な情報に基づく演奏の意味) の基本的な考え方が集約されている。

HIPは長い間、古楽器の演奏家たちの専売特許だったのだが、80年代にモダンの楽器の演奏家たちが興味を示すようになった。今思えば、その端緒を開いたのもアーノンクールだった。1975年にコンサートヘボウ管弦楽団を指揮してバッハの受難曲を演奏したが、それが古楽器系の演奏家がモ

ダン楽器のオーケストラを振った最初の事例ではないだろうか。そんなアーノンクールの名言に「18世紀以前の音楽は語り、それ以後は描く」がある。「音楽の語り」で重要な役割を果たすのが、スラーやスタッカートなどのアーティキュレーション。かつてそれは言語の子音と同じとされ、楽器の多様な発音を組み合わせてあたかも会話のように音楽を語らせた。

いずれにせよ、1980年代から欧州のモダン楽器のオーケストラは競って古楽器系の演奏家を指揮台に招くようになった。近年はその傾向がさらに増し、レパートリーもロマン派や20世紀初頭の音楽へと拡大している。

様々な古楽系指揮者たち

このような歴史からいって、HIP系の指揮者に、古楽器の演奏家で自らオーケストラを創設して経験を積んだ人が多いのは当然だろう。ただ、HIPといっても実際には様々。基本は押さえた上で膨大な情報から自分が正しいと思えるものを選択し、焦点を絞って表現や解釈に生かすことになり、当然ながら指揮者によって持ち味やレパートリーが異なる。

以下、主な古楽系の指揮者を挙げてみよう。ドイツには、かつてムジカ・

アンティクワ・ケルンの音楽監督、ヴァイオリン奏者として一世を風靡したラインハルト・ゲーベルがいる。ドイツ・バロック周辺を得意とし、現在ベルリン・バロック・ゾリステンの音楽監督を務める。フライブルク・バロック・オーケストラの創立メンバーの一人、トーマス・ヘンゲルブロックも元ヴァイオリン奏者。レパートリーはルネサンスから現代音楽まで。やはりドイツ系の音楽を得意とし、2011年にはバイロイト音楽祭に登壇した。フランスで人気の高いのはマルク・ミンコフスキ。バロック・ファゴット奏者だったが、ルーヴル宮音楽隊を結成。柔らかな色彩感とユーモアに富んだ音楽作りが魅力だ。同じくフランスの鬼オフランスワ＝グザヴィエ・ロトはル・シエクルを率いてストラヴィンスキーの管弦楽曲等で目覚ましい成果をあげている。読響には2015年に客演して、20世紀とハイドンを組み合わせた興味深いプログラムを披露、とくにハイドンの〈十字架

上のキリストの最後の7つの言葉〉は、すべてのフレーズが「語り」として聴こえて見事だ



□ト ©Marco Borggreve

った。

古楽研究に長い伝統のあるイギリスのロジャー・ノリントンは、1960年代に合唱指揮者として音楽家のキャリアをスタートさせ、80年代中頃にロンドン・クラシカル・プレイヤーズとベートーヴェンの交響曲全集のCDをリリースして注目された。ジョン・エリオット・ガーディナーも忘れてはならない。バロックとロマン派の二つのピリオド楽器のオーケストラを率いて様々な時代の音楽を手掛ける。欧州の一流オーケストラへの客演も盛んに行い、円熟味のある解釈を聴かせている。

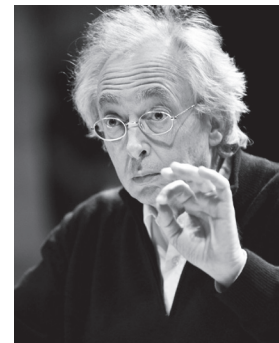
古楽演奏の聖地、オランダ・ベルギーにも優れた指揮者がいる。オランダのトン・コープマンは40年程前に古楽のオーケストラと合唱団を結成し、バッハの教会カンタータ全集など膨大な録音がある。現代楽器のオーケストラでは初期ロマン派まで振る。学問的な研究に裏打ちされると同時に、軽やかなリズムと生き生きとした演奏に人気がある。2013年に読響に客演したフィリップ・ヘレヴェッヘはベルギー出身。合唱の指揮者として頭角を現し、バロックの他、ブルックナーなどを得意とする。音楽の修辞学に造詣が深く、音楽を美しく、かつ意味深く語らせることに定評がある。

イタリアのヴァイオリニストで指揮者ファビオ・ビオンディはイタリア・

オペラを得意とする。そして10月にイタリア・バロックを始めとするプログラムで読響

に登壇する。ヘレヴェッヘ
©Michiel Hendryckx
ジョヴァンニ・アントニーニはリコーダー奏者。80年代後半からイタリアで最初の古楽器のアンサンブル、イル・ジャルディーノ・アルモニコを率いてヴィヴァルディの協奏曲を次々とリリース。強めのアーティキュレーションと大胆な表現、ダイナミックかつ躍動感溢れる演奏でイタリア・バロックのイメージを塗り替えた。

邦人音楽家も挙げておこう。やはり10月に読響を振る鈴木雅明は、チェンバロ・オルガン奏者、指揮者。1990年に合唱団と器楽のバッハ・コレギウム・ジャパンを結成して以来、バッハの宗教曲の解釈者として世界的に高い評価を得ている。鈴木は師のコープマンと同様、学問的な研究と楽譜の深い読みに基づき、音楽作品の本質を見据えた情感豊かで精神性の高い音楽をする。子息の優人、弟で名チェリストの秀美も指揮者として活躍中。これから

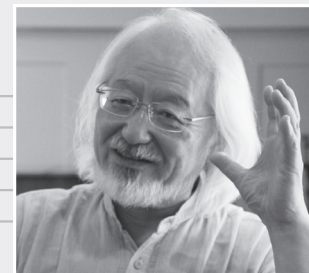


ヘレヴェッヘ
©Michiel Hendryckx

(なすだ つとむ・音楽評論家)

●鈴木雅明さんインタビュー

知的でノーブル メンデルスゾーンの優美さ



——15年ぶりに読響にご登場いただきます。

もう15年もの長い時間が経っているんですね。初共演の2000年に指揮したJ. S. バッハ〈マタイ受難曲〉のメンデルスゾーン版は、楽器の変遷などから難しい曲でしたが、バッハの美しい感じが良く出ていました。03年のモーツァルトのミサ曲ハ短調では、管楽器が見事だったことなどを思い出します。10年に芸大の教授を退任してから国内外の楽団への客演が増えています。久しぶりの読響との共演は楽しみです。

——後半には、メンデルスゾーンの二つの作品を演奏します。

シンフォニー・オーケストラへの客演の際、メンデルスゾーンは常に演奏したいと思っている作曲家の一人です。詩篇第42番は一番有名な詩篇で、以前から演奏したかったのですが、今回が初めてです。メンデルスゾーンの最も良い面、知的でノーブルな部分が出ている曲で、いわば水彩画的な優美さがあります。オラトリオ〈キリスト〉

は、〈エリア〉〈パウルス〉と並び“三大オラトリオ”になるはずだった作品でしたが、残念ながら未完に終わり、小受難曲のような曲になりました。バッハの受難曲のスタイルから影響を受けていて、短いですが劇的な部分を持った非常に強い曲です。今回もう一つ楽しみなのは、11年のベルリン以来となるRIAS室内合唱団との共演。表現力が豊かで、本当に素晴らしいです。——メンデルスゾーン作品に、強い思い入れをお持ちですね。

メンデルスゾーンには昔から興味を持っていました。J. S. バッハとの繋がりがとても深いことも理由です。メンデルスゾーンは当時大変な人気作曲家でしたが、ワーグナーによるユダヤ人論の著作などから、不当に低く評価されるようになってしまいました。それは今日まで続き、日本でもその影響が強く残っていて、正当に評価されていません。詩篇第42番などももっと演奏されて然るべきですし、今後も彼の素晴らしい作品を紹介していきたいですね。
(聞き手・事務局)

◎特別客演コンサートマスター

日下紗矢子

Sayako Kusaka

読響×古楽のスペシャリスト
共演が楽しみです

「10月は、読響の主催公演4プログラムすべてでコンサートマスターを務められます。聴きどころは」

何と言っても、読響初登場のジョヴァンニ・アントニーニさんの話をしなければなりません。私はベルリン・コンツェルトハウス管のコンサートマスターと室内オーケストラのリーダーも務めています、ある時ヘンデルの合奏協奏曲を演奏することになりました。どうしても準備がしっくりとこなくて、行きつけのレコード店を訪ね、「これを聴きなさい」と薦められたのが、彼が創設した古楽団体「イル・ジャルディーノ・アルモニコ」のCDでした。そのあまりの素晴らしさ、斬新さに驚き、心が高鳴りました。「どうしたらこういう音楽が作れるのだろうか」。そこから流れてくる音楽は、私の慣れ親しんだ音楽の世界とはかけ離れていて、とてつもない衝撃を受けました。

4年前に、彼がコンツェルトハウス管に初めていらした時に、どのように

音楽を作り上げるのかぜひ知りたいと思い、「一緒に読んで下さい」と図々しくもスコアを持って楽屋に押しかけました。「読響とならどんな演奏になるのだろう」と思い、来日の意向をそれとなく聞いてみると、「日本は遠いなあ」と仰っていたので、今回の公演の実現を大変嬉しく思っています。彼の音楽の大きな特徴は、対話を大事にすること。音楽が立体的でうねりがあり、楽器間のバランスが素晴らしい。音楽の表現には何万通りもあり、音楽に生命を吹き込むためにいつもフレキシブルでいること、想像力を働かせることの大切さに彼と会って改めて気付かされました。

今回演奏するバロックや古典派の曲は、読響で取り上げられる機会は少なく、私たちにとってチャレンジです。というのも、R.シュトラウスやチャイコフスキーなどを毎週のように弾いている私たちがバロック音楽、しかも古楽のスペシャリストのもと、数回のリハーサルで仕上げて本番を迎えるわけですから、難易度は高い。でも、いつもとは一味違う表現をみんなで少しでも消化することができたら、読響にとって大きな財産になると思います。どういう演奏になるか、期待が高まり



ます。また、同じく世界的に有名な古楽団体バッハ・コレギウム・ジャパンの指揮者、鈴木雅明さんとは、私は今回が初共演です。たくさんの素晴らしい録音を聴かせていただいています。隅々まで計算しつくされた緻密な音楽作り、そしてその中に溢れ出る優雅な美。今回のプログラムをどのように鈴木さんが表現なさるのか、とても楽しみです。

「最近、バロックの勉強に力を入れていると聞きました」

バロックに以前から興味を持っていたのですが、モダン楽器に満足していて、オリジナル楽器を弾こうとまでは考えていませんでした。オーストリアの指揮者、ニコラウス・アーノンクールが著書で、「どんな楽器で弾いてもいい。決まりはない。モダンでは表現しきれないと感じたら、替えたらいいのだ」と記しています。1年前頃から、私の求めているものが変化してきて「モ

ダンでは表現できないのでは」と感じ始めました。現在模索中で、理想に近づけるようオリジナル楽器の勉強を始めているところです。

「今年になって6度目の来日です。行き来は大変でしょう」

日本とドイツの音楽シーンに関わることができて、幸せ

を感じています。音楽シーズンは、日本では4月から、ドイツは9月から始まるので、どうしてもスケジュールの調整が難しい。ダブル・ブッキングしないよう気をつけています。今年はあともう一回来日して、12月の〈第九〉公演にも出演する予定です。

ドイツでは、自分の時間が持てて、落ち着きます。近くには大きな公園があり、車を10分も走らせれば、森や湖もあり、自然に触れる機会が多くなっています。そういう歳になったのでしょうか、自分に必要なことだと最近強く感じるようになりましたね。でも、実家のある東京での都会生活も楽しく、どちらも満喫しています。

profile くさか・さやこ

東京芸術大学を卒業後、米・南メソヂスト大学大学院及びフライブルク音大に留学。2008年からベルリン・コンツェルトハウス管の第1コンサートマスター。パガニーニ国際コンクール第2位、日本音楽コンクール第1位を受賞。ソロや室内楽でも国際的に活躍している。13年4月に読響コンサートマスターに就任、17年4月から特別客演コンサートマスター。ベルリン在住。

心に残るクラシック

ヤマザキマリ——③

Mari Yamazaki

夭折の天才リパッティ

ショパン：ワルツ 第5番 変イ長調 作品42



©川上尚見

娘にも自分と同じく、音楽の道に進んでもらいたいと心の底で願っていた母は、私が4歳の時にヴァイオリン、そして5歳でピアノを習わせるようになった。自分が教えるについ厳しくなってしまうからと、オーケストラの同僚に私の指導を頼みはしたものの、結局、母は時間が許す限り私の練習に立ち会った。

しかし、日が沈むまで身体中泥だらけになりながら外で遊んでばかりいる野生児のような娘が、楽器を奏でることにそれほど熱心になれないのは、最初から明らかだった。しかも、就学前にはもう、自分は将来絵描きになるなどと発言し、母は慌ててそんな私に『フランダースの犬』を読ませ、絵描きという職業の過酷さの忠告を試みたこともあった。「ね、絵で生きるって大変でしょ、認められなければこんなふうに野垂れ死にしちゃうのよ」と畳みかけてくる母に、生意気だった私は「音

楽家も同じでしょう」と答えたそうだ。

当時、母はルーマニアのピアニスト、ディヌ・リパッティにハマっていた。いつも居間のステレオの上にはリパッティによるショパンのワルツ集のアルバムが立てかけてあった。母は「このピアニストは素晴らしい才能があったのに、病気で早くに死んでしまった。最後のコンサートまで痛み止めの注射をしてピアノを弾き続けたのよ」と語っていた。そして、ショパンの旋律に耳を傾けながら、「こんな美しい音色をピアノから引き出せるなんて正真正銘の天才よ、ショパンが生きてたら大感激していたわ」としみじみ感心していたものだった。リパッティの最後のリサイタルを録音したレコードを掛ける時は、涙を零さんばかりに、「痛み止めの注射を打ちながらもこんな演奏ができるなんて……この人こそ演奏家の鑑よねえ」と溜息を漏らしもした。今は亡き天才ピアニスト

に、情熱的な思いを馳せる母の姿は、木登りや虫取りに明け暮れていた私には、まるで浮世離れした夢見る乙女のように見えた。

リパッティはもちろん、『フランダースの犬』のネロのように才能を認められずしてこの世を去ったわけではない。16歳でその希有な才能を見出されてから、死後半世紀以上経った今でも、伝説の夭折ピアニストとしての名声を留めている。早死にはともかく、できれば娘にも、リパッティのように人々を魅了できる演奏家になって欲しいという思いを一時は育むこともできたが、残念ながらその娘は、ヴァイオリンは開始後5年、ピアノは17歳で、イタリアに留学をするのを機にあっさりやめてしまった。娘はいつ飢え死にするかもしれない絵描きの道を選んだのである。

数年後、フィレンツェの音楽院で事務をしている友人の家に、なんと母が持っていたのと同じリパッティのショパンのワルツ集があるのを偶然見つけて、思わず感嘆の声を上げた。久しぶりにそのレコードを掛けてもらおうと、何年も前に母が聴いていた情熱的な賛辞の数々が頭の中に蘇ってきた。

私はリパッティが奏でるショパンの演奏の中でも、特に流れる川のような旋律のワルツ第5番変イ長調作品42というのが子供の頃から気に入ってい

た。その後、プロからアマチュアまで、いろいろな人がこの曲を奏でるのを聴く機会があったが、音符の並び通りの



ディヌ・リパッティ (1917～1950)

華々しさを存分に演出しつつも、高貴、しかも巧妙なテクニックを軽やかに駆使する繊細なバレリーナの踊りのように奏でるリパッティの演奏は、やはりあらためて特別なものに感じられた。

自分もこの曲を弾いてみたい、と思い立った私は、その友人に頼んで彼女の留守中にピアノを借り、練習することにした。結局、友人の家に入り浸ることが増えてしまい、私は、当時の住処に中古のアップライトを導入することに決め、気がつけば再びピアノを弾くようになっていた。イタリアへ私の様子を見に訪れた母は、家にピアノがあるのを見て驚いた。「弾いてみろ」というので、仕方なく習得したてのワルツ第5番を披露したら、「ヘタクソだわ」と笑われた。笑いながらも、彼女の表情にはどこか勝ち誇ったような満足感が垣間見えたのが忘れられない。

ジャズの要素がふんだんに盛り込まれたアダムズの衝撃作

11/28 (水) 19:00 第583回 定期演奏会
サントリーホール

スクロヴァチェフスキ：ミュージック・アット・ナイト
モーツァルト：フルートとハープのための協奏曲
アダムズ：シティ・ノワール

指揮：デニス・ラッセル・デイヴィス

フルート：エマニュエル・パユ ハープ：マリー＝ピエール・ラングラメ



エマニュエル・パユ

上岡がピアノを弾き、読響メンバーと室内楽を披露

12 / 4 (火) 19:30 第20回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール ※18:00 解説

《上岡敏之と読響メンバーの室内楽》

ブラームス：ピアノ四重奏曲 第3番 マーラー：ピアノ四重奏曲 断章
ボロディン：ピアノ五重奏曲

ピアノ：上岡敏之 ヴァイオリン：赤池瑞枝、荒川以津美、山田友子
ヴィオラ：長岡晶子、渡邊千春 チェロ：松葉春樹、室野良史



上岡敏之

歓喜の歌！ イタリアの名匠が指揮するベートーヴェン〈第九〉

12/19 (水) 19:00 FUJITSU Presents Concert 〈第九〉特別演奏会
サントリーホール

12/20 (木) 19:00 第617回 名曲シリーズ
サントリーホール

12/22 (土) 14:00 第212回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

12/23 (日) 14:00 第212回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

12/24 (月) 14:00 第108回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

12/25 (火) 19:00 SHINRYO Presents 〈第九〉特別演奏会
東京芸術劇場コンサートホール



マッシモ・ザネッティ



アガ・ミコライ

ベートーヴェン：交響曲 第9番〈合唱付き〉

指揮：マッシモ・ザネッティ

ソプラノ：アガ・ミコライ メゾ・ソプラノ：清水華澄

テノール：トム・ランドル バス：妻屋秀和

合唱：新国立劇場合唱団 合唱指揮：三澤洋史



清水華澄



トム・ランドル



妻屋秀和

11月28日~12月 公演の聴きどころ

11月28日の《定期演奏会》は、アメリカの名匠D.R. デイヴィスが得意のミニマル音楽からアダムズの〈シティ・ノワール〉を指揮する。本作は、指揮者ドゥダメルがロサンゼルス・フィルの音楽監督に就任した折の記念演奏会のために書かれ、執拗に繰り返されるリズムとジャズのテイストが光る話題作。前半は読響の常任指揮者・桂冠名誉指揮者を務めたスクロヴァチェフスキ（17年2月逝去）作曲の〈ミュージック・アット・ナイト〉を演奏し、故人へのオマージュとする。また、協奏曲ではベルリン・フィルの首席奏者の二人、フルートのパユとハープのラングラメによる極上のモーツァルトにも注目したい。

12月後半には、年末恒例のベートーヴェン〈第九〉公演を、19日から25日までに計6公演開催する。今年は、イタリア出身の俊英指揮者で欧州の歌劇場でキャリアを重ねるザネッティが読響に初登場。ドイツ系作品の手堅い解釈でも定評ある名匠が、“歓喜の歌”を高らかに響かせる。声楽陣には今年も世界で活躍する実力派を迎える。ソプラノはアガ・ミコライが2016年の〈第九〉以来、2年ぶりに共演。バイエルン国立歌劇場、ウィーン国立歌劇場、パリ・オペラ座など主要な歌劇場で活躍し、高い評価を得ている。メゾ・ソプラノは、多くのオペラに出演し圧倒的な歌唱力で目覚ましい躍進を見せる清水華澄。テノールのトム・ランドルは、ベルリン国立歌劇場、ミラノ・スカラ座などに出演するほか、バレンボイムらの指揮で著名楽団とも共演する実力派だ。バスは、堂々たる風格と深みのある美声が特徴の妻屋秀和。去年はメシアン之歌劇〈アッシジの聖フランチェスコ〉の兄弟ベルナルドでも存在感を示した。合唱には日本最高峰のプロ団体である新国立劇場合唱団を迎え、年の瀬の日本を彩る風物詩〈第九〉にふさわしい手応えと感動をお届けする。（文責：事務局）

1回券料金表

定期・名曲・みなとみらい	S ¥7,500	A ¥6,500	B ¥5,500	C ¥4,000
マチネー	S ¥7,500	A ¥5,500	B ¥4,500	C ¥4,000
12月〈第九〉	S ¥9,500	A ¥7,500	B ¥6,000	C ¥4,500
大阪定期	BOX ¥8,500	S ¥6,100	A ¥5,100	B ¥4,100
読響アンサンブル	¥4,000			

首席客演指揮者・山田の〈オルガン付き〉&〈ローマの祭〉

1/8 (火) 19:00 第618回 名曲シリーズ
サントリーホール

サン＝サーンス：交響曲 第3番〈オルガン付き〉
ラロ：チェロ協奏曲
レスピーギ：交響詩〈ローマの祭〉

指揮：山田和樹(首席客演指揮者) チェロ：ニコラ・アルトシュテット



山田和樹

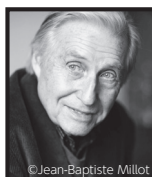
山田が千夜一夜物語を振り、スペインの国宝級の巨匠が共演！

1/12 (土) 14:00 第213回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

1/13 (日) 14:00 第213回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ラヴェル：高雅で感傷的なワルツ
ラヴェル：ピアノ協奏曲
リムスキー＝コルサコフ：交響組曲〈シェエラザード〉

指揮：山田和樹(首席客演指揮者) ピアノ：ホアキン・アチュカロ



ホアキン・アチュカロ

ワーグナーから藤倉作品まで、山田が描く神秘的な音世界

1/18 (金) 19:00 第584回 定期演奏会
サントリーホール

諸井三郎：交響的断章
藤倉 大：ピアノ協奏曲 第3番〈インパルス〉(共同委嘱作品／日本初演)
ワーグナー：舞台神聖祭典劇〈パルジファル〉から第1幕への前奏曲
スクリャービン：交響曲 第4番〈法悦の詩〉

指揮：山田和樹(首席客演指揮者) ピアノ：小菅 優



小菅 優

ウィーンの俊英ゲッツェルとジャズ界の鬼才・小曾根が初共演

1/31 (木) 19:00 第22回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール(大阪)

ワーグナー：楽劇〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉
第1幕への前奏曲

モーツァルト：ピアノ協奏曲 第23番
ブラームス：交響曲 第1番

指揮：サッシャ・ゲッツェル ピアノ：小曾根 真



サッシャ・ゲッツェル

お申し込み・
お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390
(10:00～18:00／年中無休)
ホームページ・アドレス <https://yomikyo.or.jp/>

小森谷が読響メンバーと繰り広げる白熱のアンサンブル

2/5 (火) 19:30 第21回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール ※19:00から解説

《小森谷巧リーダーによる室内楽》

モーツァルト：オーボエ四重奏曲
シューベルト：八重奏曲

ヴァイオリン：小森谷 巧、太田博子 ヴィオラ：柳瀬省太
チェロ：遠藤真理 コントラバス：大槻 健 オーボエ：辻 功
クラリネット：金子 平 ファゴット：岩佐雅美 ホルン：日橋辰朗



小森谷巧

小林が〈運命〉を振り、英国の新鋭ワリー＝コーエンが共演

2/9 (土) 14:00 第214回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

2/10 (日) 14:00 第214回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ウェーバー：歌劇〈オベロン〉序曲
チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲
ベートーヴェン：交響曲 第5番〈運命〉

指揮：小林研一郎(特別客演指揮者)

ヴァイオリン：タムシン・ワリー＝コーエン



小林研一郎



タムシン・
ワリー＝コーエン

二人のカリスマが競演！ 炎のマエストロ×天才ピアニスト

2/14 (木) 19:00 第619回 名曲シリーズ
サントリーホール

2/16 (土) 14:00 第109回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

チャイコフスキー：ピアノ協奏曲 第1番
ブラームス：交響曲 第2番

指揮：小林研一郎(特別客演指揮者) ピアノ：牛田智大



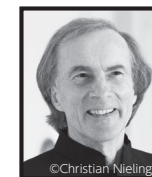
牛田智大

ドイツの巨匠が1公演のために来日。ブルックナーの神髄に迫る

2/22 (金) 19:00 第585回 定期演奏会
サントリーホール

リーム：Ins Offene... (第2稿)
ブルックナー：交響曲 第7番

指揮：ローター・ツァグロゼク



ローター・
ツァグロゼク

NISSAY OPERA 2018 オペラ〈コジ・ファン・トゥッテ〉

■ 11/10 (土) 13:30、11/11 (日) 13:30 日生劇場

指揮：広上淳一 演出：菅尾 友

出演：嘉目真木子、高野百合絵、市川浩平、加来 徹 ほか (10日)

高橋絵理、杉山由紀、村上公太、岡 昭宏 ほか (11日)

モーツァルト：歌劇〈コジ・ファン・トゥッテ〉 全2幕

(イタリア語原語上演・日本語字幕付)

[料金] S ¥9,000 A ¥7,000 B ¥5,000 学生 ¥3,000

[お問い合わせ] 日生劇場 03-3503-3111 (10~18時)

東京イギンコンサート ベートーヴェン〈第九〉

■ 11/18 (日) 14:00 東京芸術劇場コンサートホール

指揮：齋藤友香理

ソプラノ：佐藤 瞳 メゾ・ソプラノ：郷家暁子

テノール：古橋郷平 バリトン：三戸大久

合唱：成城合唱団

ベートーヴェン：交響曲第9番〈合唱付き〉

[料金] S ¥8,000 A ¥6,000

[お問い合わせ] 東京芸術劇場ボックスオフィス

0570-010-296 (10~19時/休館日を除く)

読響 名曲コンサート

■ 12/2 (日) 14:00 奥州市文化会館 大ホール (岩手県奥州市)

指揮：井上道義

ヴァイオリン：三浦文彰

井上道義による〈運命〉の音楽解剖 (アナリーゼ)

ベートーヴェン：交響曲 第5番〈運命〉

ハチャトゥリアン：組曲〈仮面舞踏会〉から“ワルツ”

ハチャトゥリアン：ヴァイオリン協奏曲

[料金] S ¥7,500 A ¥7,000 (高校生以下 ¥3,500) B ¥5,000 (高校生以下 ¥2,500)

[お問い合わせ] 奥州市文化会館 0197-22-6622